



トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

〒163-0437 東京都新宿区西新宿2-1-1

新宿三井ビル37F

Phone: 03-3344-1701(代)

Fax: 03-3342-6911

No.85

Oct. 1998

グローバル化する社会環境と財団活動

- 会長就任にあたって -

会長 豊田 達郎



私はこの7月にトヨタ財団の会長に就任致しましたが、それ以降の短期間に理事会や中国古代漆器展、助成金贈呈式等の行事が行われました。これらの財団活動を通じ、社会貢献活動の重要な担い手としてのトヨタ財団のこれからの方向について、今までの企業経営とは少し違う視点から、いろいろ勉強をしているところです。幸い、理事長に木村尚三郎先生をお迎え致しましたので、先生の深い学識と洞察力をもって色々ご指導頂けることになり、たいへん心強い次第であります。

トヨタ財団は既に24年にわたって活動を続けてきており、創立以来一貫して社会的な問題を視野において、それに対する調査研究や解決のための色々な提案や実際の活動への助成を続けています。運営の面でも専門のスタッフをもち、各分野ごとに選考委員会を選考に当たるなど、社会の公器としての責任を意識した運営を指向してきたといえましょう。このような運営方式が日本ではあまり一般的ではなかった時期からトヨタ財団の活動は始まったわけで、その意味でも意義深いものがあると思います。

もちろん、アメリカのフォード財団に代表される大型財団とは規模が違いますし、同国には他にも大型財団が数多く存在し活動しているわけですから、社会における財団のステイタスは日本と

はかなり異なります。このような社会環境の中でトヨタ財団が今まで築いてきたものは、これからの日本社会にとっても大きな財産であると思います。

最近、金融をはじめとして日本の諸制度に関する批判が高まり、グローバル・スタンダードに沿った見直しが議論されています。社会貢献活動および財団活動についても、日本では比較的歴史が新しいのですが、しっかりとした取り組みをしていかないと世界で理解され、評価されることは必ずしも容易ではないと思います。財団の運営について今後は従来にも増してグローバル・スタンダードに沿った取り組みが必要とされると思います。

私のアメリカ滞在経験を通じて感じるのは、アメリカ人が社会貢献活動を自分達の誇るべきカルチャーとして考えているということです。確かに、色々な人種や文化が混じりあった社会においては、個々人の意志あるいはその発展型としての財団による活動が社会全体の中で大きな意味を持っています。日本においても近年、社会の抱える問題は複雑化、深刻化してきていて、今迄のように政府や企業だけでは解決できない問題がたくさん出てきています。こうした問題に対してボランティアや市民活動グループ、NGO、財団という社会貢献活動あるいは非営利活動といった枠組みでの取り組みを進めることが大切なことだと思います。(次頁へ)

Contents

愛情と五感の世紀へ(理事長 木村尚三郎) - P2 / アジア地下水砒素汚染フォーラム - P3
トヨタ財団 WEB サイト 10 月よりスタート - P4 / トヨタ自動車より新たに 50 億円の寄付 - P4
1998 年度助成対象の決定 - P5 / 新刊紹介 - P6

さて、企業の社会貢献活動と財団の関係について、更に考えてみたいと思います。ヨーロッパ財団センターによるとトヨタ財団は「独立・企業財団」という分類に入っているそうです。独立した理事会による財団の運営と、出捐元が企業であることから来る分類であるとのこと、なかなか面白い分類だと思いました。

一般的には、出捐者である企業と財団の活動はなかなか微妙な関係であると思

います。ガバナンスの点では財団としての独立性が確保されることが大前提ですが、最近のように企業の社会貢献活動やメセナ活動が活発になってくる、あるいは企業としての環境への取り組みが企業活動そのものに入ってくると、財団の活動分野との重複も出てきているようです。同じ問題でもそれぞれ違う立場で取り組んでいくことは十分意味があると思いますが、分野によっては双方の経験やネッ

トワークから得るものも大きいと思います。いい意味での企業と財団の交流はこれからの重要な課題だと思えます。

最後になりましたがトヨタ財団を今日まで育てて下さった理事、評議員、選考委員、それに助成を受け様々な成果をあげられた方々に御礼を申し上げますとともに、これからもトヨタ財団らしい着実な取り組みを続けたいと思いますので一層のご支援をお願い申し上げます。



愛情と五感の世紀へ

- 理事長就任にあたって -

理事長 木村尚三郎

このたび、理事長を勤めることになりました。よろしく申し上げます。就任にあたり日頃、私が考えておりますことを述べたいと思います。

人と、自然と、過去と仲良く

20世紀は科学と技術の発展の時代であったといえます。そこでは、機能性、経済性、効率性が尊ばれたわけですが、いまや全世界的に大きな意味で技術文明の成熟期がやってきて、それとともにひたすら前へ進んでいくのではない、新しい時代のあり方と価値観が生み出されようとしているところではないかと思います。

それは一言でいえば、ともに好きになりながらともに幸せになるという生き方を大事にする、愛情の世紀の始まりということではないかと思います。

そのひとつは人間同士が好きになりあうということ。これは国際間も含めて友達をつくるということです。

もうひとつは自然と友達になりあうということ。様々な自然とお互いに好きになりあって、共に生きて行く知恵を發揮する。

そしてもうひとつは過去の人と友達になりあうということ。過去の人々の様々な美しさの感覚とか、あるいは勇気、暮らしと命の知恵というものを、掘り起こしながら明日の時代に繋げていくということです。これら3つの、愛情のある共生、友達関係が21世紀の知恵と幸せを創っていくと考えています。

芸術文化の時代

いま日本の若い人たちは、たしかに政治経済にはあまり大きな関心は持ちません。しかしその代わり芸術文化、スポーツ、そしてボランティア活動には大きな情熱を注ぐようになってきました。美しいものに感動し、自分なりに手足を動かし、お互いに交流をはかり、コミュニケー

ションを実現し、その中からさらに知恵を出し合う。あるいは人類共通の痛みを覚えながら自分もそれに奉仕する、助けるといって通して幸せを得る。そのような愛情というものが各国の若い人たちにとって生き方の大きな主題になってきつつあると思います。そしてどこの国においても文化とか芸術の持っている意味がたいへん大きくなって来ています。

これはまた近代以前の時代への回帰という面もあります。たとえば日本の場合、戦前、地主の人たちは、農家の子どもたちを集めてオルガンで歌を教えたり、アメリカから最新の農業技術をもってきて農民に教えたり、あるいは伝染病がはやれば一生懸命消毒の粉を撒いたり、そうしたことをまさにボランティアでやっていた。だからみんな感謝して無料で地主の家に行って、そういう下働きの奉仕もしたわけです。

またたとえば火事と喧嘩は江戸の華といわれるように、江戸時代は花見とか花火とか、華が大切とされ、華のある生き方、美しい生き方があったわけです。それからお遍路さんとかお伊勢まいりとか、手足を動かすこと - つまりスポーツといってもいいと思いますが - も盛んに行われました。

五感の復権

近代を見直す上で五感の復権ということが大事です。衣食住の衣をとっても、今のファッション・ショーでは、デザインや色などの視覚ばかりが問題にされる。しかし前近代はそれだけではなく、着心地、布の肌触り、あるいは香を焚き込んであるその香りとか、衣擦れの音、こうしたもの全てが大事だったのです。近代は要するに合理性の窓としての目だけを使っていたということで、これからは五感全体のファッション・ショーにならねばいけなと思うのです。

さらに、視覚それ自体も今は理性的な眼から感性的な眼に変わりつつあります。たとえばヨーロッパの教会堂には最後の審判など天井画が描かれています。今はこれをテレビ局が檜を組んでライトを当てて撮影し、それを教養番組などで見せていますが、昔はそもそも下から見上げていたわけですから、西日が当り、光の動きにつれて絵の主題が左から右へ展開していくのです。たとえば左に描かれているのが、お棺から死者が復活してくる場面、真ん中に来るとそれがキリストに裁かれている場面、右に来ると、地獄に追込まれている場面。それが時間とともに動いていきドラマを見ているようになるのです。そういう下から見上げる見上げ方が大事で、その時初めて芸術品の対象としてではなく様を感じるわけです。実はそういう見方というものが今まではなかった。

また、下から教会堂を見ると石の柱が上のほうで寄ってきて、石で造った森に見える。本来まっすぐには見えないのが自然なのです。これをカメラのあおりを効かせて上も下も同じ幅に撮るのは不自然なのです。つまり近代の眼のほう

が歪んでいる。

視覚を感性的な眼に切り替えると、芸術鑑賞の仕方、合理的鑑賞から感性的な鑑賞へ変わってきます。ああ、これは石で造った森なんだな、ここにいると魂も安心なんだと、そう思えるようになるわけです。

五感の復権はまた世界的な傾向でもあります。最近、欧米では嗅覚も非常に鋭くなってきて、フランスでもジャコウのような強い香水を胸元や耳の後ろにつけるといっては今ははやらない。ひざの裏あたりに微香性の植物系の香水をつけて、足を組みかえたときにかすかな匂いがしてきて好きになってもらえるような、つまり自己主張型の香水から、おくゆかしい香水に変わりつつある。香道みたいなものもこれからは新しい形で復活してくると思います。

かくして五感の復権に根差した芸術文化の時代がいま始まろうとしています。その中でトヨタ財団に求められる役割は何か。そこでは、人間にとってしあわせになるような美意識が求められていると思います。もちろん理性はなくては困るのだが、理性と感性のバランスのとれた人がこれから必要なのです。アインシュタインも「私の世界像」のなかで「最高に美しいものは神秘的である」と語っているのですが、美しいものを美しいと感じる心、それが新しい世紀を拓く力になるのだと思います。

常に時代を先取りした財団活動を展開していきたいと思っておりますので、今後皆様のさらなるご指導、ご鞭撻をお願いいたします。

アジア地下水砒素汚染フォーラム 11月20日に横浜市で開催!

当財団では、来る11月20日(金)、アジア砒素ネットワーク(AAN)および応用地質研究会(RGAG)との共催により、「アジア地下水砒素汚染フォーラム - バングラデシュの被害報告と国際協力のあり方 - 」を横浜市のフォーラムよこはま(ランドマークタワー13F)にて開催する。

アジア各国では、近年、砒素による深刻な地下水汚染が表面化しつつある。中でも、インド西ベンガル州からバングラデシュにまたがるガンジス川下流域は、汚染面積の広さ、発生した患者数からみて、最大規模の汚染地帯と考えられている。

しかしながら、砒素の供給および汚染のメカニズムは未だ明らかとなっていない。同時に、安全な飲料水の確保が急務の課題であるにもかかわらず、対策の著しい遅れが目立っている。

このような状況下、AANとRGAGは、当財団より、それぞれ「市民社会プロジェクト助成」および「研究助成」を受け、先の問題に対処すべく、専門的な見地も踏まえ、NGOの視点に立脚しながら精力的な調査・活動を展開している。

今回のフォーラムは、言わばその経過報告に当たるものだが、世界保健機構や世界銀行など、国際機関も注目し始めた現在、今後、日本として出来る具体的な支援・協力のあり方を探ることを主な狙いとしている。

お問い合わせは、以下まで。

アジア砒素ネットワーク

Tel: 0985-20-2201

Fax: 0985-20-2286

応用地質研究会(担当・末永)

Tel/Fax: 043-225-2243

トヨタ財団 WEB サイト 10 月よりスタート

4 千件以上の助成レコードをバイリンガルで表示

URL は www.toyotafound.or.jp

トヨタ財団は今から 24 年前、1974 年の 10 月 15 日に発足した。この設立記念日を期して財団は懸案であった WEB サイトを公開することにした。

過去、24 年間のトヨタ財団の助成は 4,856 件にのぼる。今回公開するサイトでは、これら全助成対象レコードについて、題目、代表者氏名・所属、助成金額、助成決定時の計画概要などが日英両語で閲覧でき、さらに助成に基づく約 1,500 件の書籍・報告書などのアウトプットについても、書名、著者、出版社などについて知ることができる。

トヨタ財団情報処理システム

財団ではこれまで 3 年間にわたる情報基盤整備事業により、申請書の受け付け・選考から、助成手続、年次報告書の作成までの業務が一貫してデータベース中心に行えるシステムを開発してきた。現在 20 台以上のパソコンから、各職員がサーバー (Windows NT 4.0) 上のデータベース (Access 95) を毎日フル活用している。いったん入力されたデータは、選考資料

や報告書など様々な出力形式を選択できるため、資料作成から校正までのコスト・時間とも大幅に削減できる。しかもデータ自体の誤字率がクロスチェックを経てきわめて低くなるというメリットもある。

今回の WEB サイトでは、この業務用データベースをそのまま公開用に転用している。もちろん、内部的な管理情報などは一括して除外してある。さらにシステムの安全確保のため、外部の専門業者に WEB サーバー運用を委託し、内部の LAN とは物理的に切り離している。

WEB サイトでできること

サイトの設計にあたっては、助成金を探している人に対するガイダンスと、個別の助成実績にもとづく情報開示とを第一のねらいとした。研究助成や市民活動助成など公募を行っているプログラムについては、ここから応募要項と過去の助成対象一覧表などを入手できる。申請書についても、現在公募中の市民活動助成の書式が PDF の形で取り出せるようになっている。

過去の助成対象については和・英年次報告書に収録した内容はすべて検索表示できる。また、1990 年以降の研究助成の日本語に限ってであるが、助成終了時の報告書要約本文までを見られるようにした。内容は、文部省学術情報センターに登録されたものと同一である。さらに、「隣人をよく知ろう」翻訳出版助成プログラムによる刊行物については、400 点弱ではあるが表紙の画像も収録した。

今まで財団に蓄積された成果を常時幅広く発信していくことができるようになったわけで、例えば「貝葉」という単語からタイ、ラオス、インドネシアにまたがり財団が過去 20 年間で助成した 37 件の国際助成の概要が通覧できるなど、これらの情報の活用についてあらたな可能性が考えられよう。

財団では、助成の成果にもとづくデータベースをこのサイトを通じて公開するなど、今後積極的な WEB の活用を試みていきたい。

トヨタ自動車より新たに 50 億円の寄附 財団基金総額 264 億円に

このほど財団はトヨタ自動車より新たに 50 億円の追加寄附を得た。これはトヨタ自動車が 1997 年に創立 60 周年記念事業のひとつとして財団への基金積み増しを決定したことを受けたもの。

財団は設立以来長らく当初の基金 100 億円をベースに活動を行ってきたが、超低金利の影響で近年財政的に苦しい状態が続いていた。昨年のトヨタ自動車の決定により 97 年度中に 100 億円の基金増額が成ったが、さらに今回 50 億円の追加で、基金総額は 264 億円に達した。最終的には 314 億円となることが予定されている。

残念ながら、基金の増額は現在の金利の状況ではただちに活動予算の増加には直結しない。財団では今後とも、将来を見据えた効率的な基金の活用をしていきたいと考えている。



1998 年度助成対象の決定

- 助成金贈呈式開催 -

9月22日に第86回理事会が開催され、研究助成など下記のプログラムについて1998年度分として合計3億5,148万円の助成対象が決定した。これにより本年度助成額の合計は先の6月理事会の分と合わせて4億3,107万円となった。

また、これらに対し10月23日に京王プラザホテル(東京都新宿区)で助成金の贈呈式が行われ、木村尚三理事長より各代表者に目録が贈呈された。

研究助成 73件、2億円

公募は4月1日から5月29日まで行われた。例年同様、基本テーマ「多元価値社会の創造」のもと、(1)多様な文化の相互理解と共存、(2)新しい社会システムの提案 - 市民社会の構築をめざして -、(3)これからの地球環境と人間生存の可能性、(4)市民社会の時代の科学・技術の4つの重点課題を掲げている。研究助成A(若手個人研究)と、研究助成B(共同研究)の2つの枠組みがあるが、今回、Aでは34件、5,000万円、Bでは39件、1億5,000万円が採択された。

なお、今回の応募総数は966件で昨年度の837件を大幅に上回り、過去最高を記録した。採択合計73件は昨年度より6件多いが、採択率は7.6%ときわめて厳しい結果であった。

市民社会プロジェクト 2件、550万円
96年度よりスタートしたプログラムであるが、一般公募は行わず財団計画型として進められている。

今回は、「野生動物の生息状況の変化と人間と動物の新たな関係についての研究

および提言」(代表:神田栄次)、「杭州西湖における市民参加型環境保全活動のしくみづくり」(代表:小倉紀雄)の2件、合計550万円が助成対象となった。

国際助成 63件、549,400ドル

昨年同様、東南アジア地域を対象に「現代社会の文化の諸課題」をテーマとして現地の研究を助成する。打診は現地研究者より通年で受け付けている。本年度は446件の打診を7月中旬に一括選考し、この中から理事会で63件、549,400ドルを対象として決定した。国別では、カンボジア6件、インドネシア11件、ラオス6件、マレーシア2件、フィリピン7件、タイ7件、ヴェトナム24件である。タイからの新規案件が再び増えるなど、アジア通貨危機も申請数に微妙な影響を与えている。

インドネシア若手研究助成 46件、408,237,000ルピア(35,260ドル)

本年度は10年以上続いた当プログラムの見直しを図るため、昨年までの重点課題への募集は休止し、修士・博士課程への助成のみを行った。公募はインドネシアのリエゾンデスクを通じて3月から4月にかけて行われ、341件の応募があった。この中から8月のジャカルタでの選考委員会を経て、46件、408,237,000ルピアが今回の理事会で採択された。

インドネシアでは多数の大学院生が中退するほど経済的困難に直面している。本年度はできるだけ件数を採る方針で、昨年度の23件を大きく上回った。

「隣人をよく知ろう」翻訳出版促進助成
日本向け、5件、1,435万円、アジア相互間、19件、125,300ドル

東南・南アジア諸国間の相互理解を目的として、歴史、人文、政治、経済、文学などの幅広い書籍を翻訳出版する。日本向けは書籍80点を選定した91年度来の5ヶ年計画がほぼ終了し、昨年度から始めた新規の受け付けも併せて5件が採択された。またアジア相互間には各国より35件の申請があり、このうち19件が選考を経て理事会で採択された。国別では、インドネシア6件、ラオス1件、タイ5件、ヴェトナム4件、パキスタン2件、モンゴル1件である。

計画助成および成果発表助成

計画助成は財団のイニシアチブに基づく非公募のプログラムである。今回の理事会では8件、3,077万円が採択された。「シリア・ダマスカス自然史博物館に関する現地調査」(代表:赤澤威)「日本と中国の法制度に関する比較研究とデータベースの構築」(代表:北川善太郎)など継続2件も含まれている。

成果発表助成は財団の助成成果の社会化を目的に、出版・シンポジウム開催等のフォローアップを行うものであるが、4件、501万円が理事会に報告された。

助成金贈呈式で贈呈書を渡す木村理事長(左)



新刊紹介

「MOX総合評価」

高木仁三郎他著
七つ森書館刊
98年8.9 A5判 424頁 ¥2,700
ISBN4-8228-9828-8

本書の基となった研究は「MOX燃料の軽水炉利用の社会的影響に関する包括的評価」と題するもので、1995年度の研究助成を受け、95年11月から97年10月末までの2ヶ年をかけて行われた。

MOXとはプルトニウムとウランの混合酸化物のことであるが、これを軽水炉で燃やす計画が日本とヨーロッパで大規模に進められようとしている。

本書は、この計画が社会に与える影響を、核拡散との関連性、安全性、放射性廃棄物対策、経済性、社会制度などの面から総合的に評価したものである。原子力資料情報室などの日本側メンバー5人に、世界エネルギー情報サービス・パリのマイケル・シュナイダー、元ストックホルム国際平和研究所所長のフランク・バーナービーなど外国メンバー4人を加えた合計9人の共同執筆になる。

構成は、報告本文のほかに、これらを要約した要約報告書80頁分、さらに外国人研究者からの寄稿論文数編が付録として収録されている。本文目次は以下のとおり。第1章：序論、第2章：MOX燃料使用上の保安問題、第3章：軽水炉でのMOX使用の安全性問題、第4章：軽水炉でのMOX燃料使用の経済性、第5章：MOXとバックエンド政策、第6章：社会的・法的側面から見たMOX計画、第7章：MOX利用にともなう放射性物質の輸送、第8章：結論と提言。(M.K.)

太平洋世界叢書 - 1

「世界史の中の太平洋」

佐藤幸男編著
国際書院刊
98年8.20 A5判 272頁 ¥2,800
ISBN4-906319-84-X

佐藤幸男氏を代表とする「アジア・太平洋マイクロステート研究会」は、1989年度以来3回にわたってトヨタ財団の研究助成を受け、太平洋島嶼地域の自立、非核化から持続的発展までのテーマを巡って国際共同研究を続けてきた。

この間の研究成果が、国際書院があらたに起こした「太平洋世界叢書」の中で5回にわたり刊行されることになった。本書はその第1冊目である。内容は、「近代世界システムと太平洋」と題する代表編者の論文をはじめ共同研究者の7本の論文からなる。いずれの論文も国際政治学を基調とするもので、いわば島嶼国を駒として太平洋上の盤面に繰り広げられた米ソ両大国の戦略ゲームの歴史的展開過程の解明と読むこともできよう。

なお、叢書では第2冊目以降として、「太平洋島嶼のエコノミー」、「ポストコロニアルな太平洋世界」、「太平洋と海洋環境」、「太平洋世界の展望」の続刊が予定されている。(M.K.)

「ロシア狩猟文化誌」

佐藤宏之編
慶友社刊
98年5.12 A5判 324頁 ¥6,000
ISBN-87449-167-7

ロシア沿海州、アムール川の支流であるピキン川流域に住むツングース・満州語系の人口2,000人の狩猟民ウデへの民

族誌、民族考古学調査に基づく学術書である。ロシア沿海州はシベリアの一部であるが、シベリア全体に16世紀以降ロシア人の移住が続き諸先住民族は伝統的な生業の経済基盤を次第に失い、ロシア文化の影響の下での伝統的な文化の変容という社会、文化的な変化を経験してきた。これらの北方文化は日本の基層文化の一部を成していると考えられるが、戦後はこの地域が東西冷戦の前線となったこと、および日露関係の膠着化により、日本人研究者が立ち入ることができず、現地調査にもとづく研究はほとんど行われなかった。本書の基礎となった現地調査は、トヨタ財団の1994年度の助成により実現したものである。

本書は7章からなり、ウデへの狩猟文化の民族誌と狩猟文化の民族考古学的考察、およびウデへ語の言語学研究的論文が収録されている。7章のうち、2章はそれぞれ国際共同研究チームのメンバーであるロシア人研究者の論文の邦訳である。

(T.M.)

「日蒙漢辞典」

徳廣彌十郎著
萩原正三、荒井伸一、高橋まり代編
ビブリオ刊
98年10.12 B5判 1708頁 ¥15,000
ISBN-4-8286-0018-3

本紙84号で紹介した徳廣彌十郎氏の遺業、「日蒙漢辞典」が完成した。編纂上の特色としては、語彙を「天体」、「動物」、「戦争」、「宗教」などの32の大項目に分けた事項別の配列としたことがある。語彙の引きにくさをカバーするため、日本語とモンゴル語の両方から引ける2種類の索引を加えた。結果として「日・蒙・漢」と

「蒙・日・漢」辞典の両面を備えるものとなった。同辞典の頁組みを参考として紹介する。(M.K.)



「台湾総督府文書目録 第四巻」

中京大学社会科学研究所・中華民国
台湾省文献委員会、監修
中京大学社会科学研究所・台湾総督
府文書目録編纂委員会、編集
ゆまに書房刊
98年3.31 B5判、上製箱入 648頁
¥18,000
ISBN4-89668-925-9

本書は1996年度研究助成の成果として出版されたものである。中京大学社会科学研究所・台湾総督府文書目録編纂委員会では助成の以前から、総督府文書目録作成を続けてきており、トヨタ財団助成が充てられたのは目録の第四巻と第五巻(近刊予定)の2冊である。第四巻は明治三十二年の総督府文書の目録であり、今後も引き続き昭和二十年まで目録編纂、出版が継続していく非常に長期的なプロジェクトの一段階である。

本書は377頁の目録と、3編の解説「明治三十二年を中心にした台湾総督府の文書

管理制度」(水野保)、「台湾における軍事的統合の諸前提」(本康宏史)、「台湾総督の律令制定権と外地統治論」(檜山幸夫)および付録「明治三十二年匪賊刑罰令による死刑執行一覧」が収録されている。(T.M.)

「知的障害をもつ子とともに
- 手織りの仲間たち -」

親子工芸教室・編
晶文社刊
98年10.30 A5判 224頁 ¥1,900
ISBN4-7949-6374-2

「知的障害をもって生まれたわが子の感性に光を当て、豊かなものに育てていきたい!」そう願う母親たちが手織りの教室をつくった。

1983年3月、親子工芸教室は、杉並区知的障害者育成の会の事業のひとつとして発足した。ここでは、知的障害をもつ人の持てる力を伸ばし、技術の向上と作品の充実を図るとともに、親子が仲間となって活動することにより、社会性を育むことも目的としている。現在は週2回、親子で手織りを勉強しているグループである。

障害をもつ子どもたちが、母親とともに織物の技術を習得していく中で、豊かな可能性を目覚めさせていく。

本書は、同教室の15年にわたる「あゆみ」を、教室の日々の活動と信頼の絆で結ばれた親子の手記を通して描いている。

- 第1章「親子工芸教室の日々」
- 第2章「“あゆみ”から」
- 第3章「母から、子から」

巻頭を飾るグラビアページの作品集も美しい。全国の同様の障害をもつ子どもたちとその母親たちを勇気づける格好の書でもある。(G.W.)

「新しい交通まちづくりの思想
- コミュニティからのアプローチ」

太田勝俊編著
(財)豊田都市交通研究所・監修
鹿島出版会・刊
98年9.20 B5判、上製 200頁
¥2,800
ISBN4-306-07214-2

「成長社会」から「成熟社会」への転換期にある今の日本社会では、あるゆる分野や事柄における見直し及び、新たな対応が必要とされている。まちづくりの分野においても例外ではなく、空洞化しつつある都市部の再活性化問題や大規模店舗の立地問題、持続可能な都市づくりといった課題などが山積している。そして、これらは、いずれもインフラとしての交通問題とも深く関わっている。

本書執筆の中核となるメンバーは、1995年度に当財団の研究助成を受け、「協調型住民参加による交通計画の可能性と課題に関する研究」を実施した。これからのコミュニティレベルでのまちづくりと交通整備のあり方を考えていくにあたっての、市民参加の仕組みを摸索したものである。本書は、その成果を取りまとめたもので、以下の通り全6章に及んでいる。

第1章:交通まちづくりとコミュニティからのアプローチ、第2章:わが国の交通計画における「住民参加」、第3章:住民参加の方法とツール、第4章:各国の住民参加制度と事例、第5章:わが国の先進的な取り組み、第6章:コミュニティからの交通まちづくりの思想に向けて

なお、本書の出版に際しては当財団より成果発表助成が行われた。(G.W.)

「チェルノブイリ事故による放射能災害 - 国際共同研究報告書」

今中哲二編

技術と人間性

98年10.20 B5判 372頁 ¥3,400

ISBN4-7645-0125-2

原発事故史上最悪といわれるチェルノブイリ事故が発生したのは1986年4月26日であった。今日すでに12年が経過しているが、広域にわたる汚染や被災者の後遺障害は今日なお続いている。

本書は、この原発事故の影響に関する研究の現状について、当財団の助成により1995年11月から97年10月にかけて行われた国際共同研究のまとめである。

ベラルーシ、ウクライナ、ロシアの被災3カ国で事故影響研究について共同研究メンバーがまとめた論文や、興味深い研究を行っている研究者に依頼した論文など33編が収録されている。

章建ては次のとおり。それぞれ4-6編が当てられている。第1章：事故影響研究の概要、第2章：放射能汚染データとその解析、第3章：周辺住民の急性放射線障害、第4章：疫学研究と健康統計データ、第5章：個別の健康影響研究、第6章：放射線生物学研究、第7章：被災者救済の制度と活動、付章：データと資料。

科学的なデータを扱った論文ばかりではなく、元ジャーナリストにより明らかにされた旧ソ連共産党の秘密議事録をめぐる論文など、事故後の評価が多角的に取り上げられている。(M.K.)

1998年度市民活動助成
公募案内

「市民社会構築へのトライアル！」をテーマに、10月1日から11月30日まで一般公募を行っています。市民活動団体に応募資格があります。法人格等の制限はありません。

助成の対象となる活動内容は、組織基盤の整備、調査・研究、会議、集会、交流活動、印刷・出版などです。

具体的な活動テーマとしては、環境と開発、障害者や高齢者の自立、途上国への国際協力、地域づくり、外国人や社会的弱者への支援、市民活動全般の推進などが考えられますが、これに限定されるものではありません。

1件あたりの助成金額は、一般のプロジェクトには200万円程度、出版事業には100万円程度がめどとなります。

応募を希望する人は、11月15日頃までに、市民活動助成係まで封書で申し込み(200円分の返送用切手を同封してください)市民活動助成の応募要項と応募用紙を取り寄せてください。

応募用紙には、「出版用」と「プロジェクト用」の2種類がありますので、どちらかを指定してください。応募用紙を提出いただく際には、団体の活動を公表する簡単な資料(パンフレットや通信など)も添付してください。

なお、本紙4頁でご紹介したトヨタ財団WEBサイトから、応募要項、応募用紙、過去の助成対象一覧などが入手できます。

漆で描かれた神秘の世界
中国古代漆器展

東京・名古屋の全日程を終了

中国湖北省で出土した二千年余り前の漆塗りの棺と漆器を公開する特別展が、東京・名古屋の4ヶ月にわたる会期を無事終了した。この特別展は、出土した棺の恒久的な保存にトヨタ財団が助成を行ったことをきっかけに実現したもので、湖北省博物館との共催になる。

東京では上野の東京国立博物館で同館との共催により7月21日から9月6日にかけて、名古屋では国際デザインセンターで9月23日から10月25日にかけて展示が行われた。会期中に訪れた人は延べ6万人を超えるにおよび、二千年の時を超えなお衰えない漆の鮮やかな色彩と、古代中国の想像力豊かな意匠を堪能した。

編集後記

豊田達郎会長と木村尚三郎理事長の新体制は7月1日よりスタートしましたが、本紙前号には間に合わなかったのであらためて本号でご挨拶申し上げた次第です。

昨年あたりから財団のホームページは無いのかというお問い合わせをいくつもいただいておりましたが、ようやくお応えできるようになりほっとしております。

その反面、内外からの応募や打診が急増するのではないかと危惧しています。どのみち走りながら考えるしかないので、どうせやるなら受身でなく、積極的にWEBの活用を図っていきたいと思います。



トヨタ財団レポート No.85

このレポートを継続してご希望の方は、お葉書にて財団までお申し込み下さい。

発行日 1998年10月31日
発行所 財団法人 トヨタ財団
発行人 黒川千万喜
編集人 久須美雅昭
印刷 真友工藝株式会社